

火山と人間社会との共生

伊藤和明

昨年は、有珠山、三宅島と、それぞれ火山周辺の地域社会に大きな影響を与えるような噴火が、相次いで発生した。

温泉街のすぐ裏山に噴火口が開いた有珠山の山麓では、噴石や泥流によって、一部の地区は廃墟同然の姿になっている。

豊かな温泉と美しい風景という火山の恵みを、存分に受けとり繁栄してきた温泉街が、いかに危険と隣合わせの存在だったかを、今回の噴火は、はっきりと見せつけるものであった。

しかし、火山学者の的確な判断にもとついて警戒避難体制が布かれ、噴火前に住民の避難が完了していて、人的被害がまったくなかったのは、まさに画期的な出来事であった。

いっぽう三宅島では、当初の予想に反して、しばしば大規模な山頂噴火が発生するとともに、山頂部が約500mも陥没して、小型のカルデラを生じた。

また大雨が降るたびに、降り積もった噴出物が泥流となって麓を襲い、被害を拡大している。そのうえ山頂火口からは、1日あたり2~5万tという有毒な二酸化硫黄(亜硫酸ガス)が発生しつづけているため、避難生活を続けている島民が帰島できるめどは、まったく立っていない。

三宅島も、豊かな海の幸や、火山島としての観光資源に恵まれていたのだが、ひとたびこのような事態になると、島での活動を長期間停止しなければならないという宿命を背負っているのである。

太古から、火山はごくあたりまえの自然現象として活動を続けてきた。度重なる噴火による噴出物が累積して、火山は自らの山体を造りあげ、周辺に優美な景観を練りひろげている。

火山高原の青いひろがり、裾野を彩る豊かな森林、カルデラ湖や堰き止め湖など、火山自身が築きあげてきた自然景観は、人びとの心を魅了し、山麓に湧きだす温泉とともに、またとない憩いの場を提供してきた。

日本の国立公園28のうち、17が活火山を含んでいることから、火山が自然景観のうえで果たしている役割を、うかがい知ることができる。

一般に、火山の周辺は肥沃な土壌や清澄な湧き水に恵まれているため、さまざまな土地利用が進んできた。さらに近年は、火山特有の自然環境が、リゾート地として好適なため、別荘地やゴルフ場、スキー場などが開かれ、観光開発の手が火山の斜面を急速に這い上がってきている。自動車道路も整

備され、アクセスが容易になったため、いとも簡単に活火山の山頂近くまで登れる所も少なくない。

しかし裏を返せば、このような活火山地域の開発は、訪れる人を、知らず知らずのうちに噴火の危険に近づけているということができる。つまり、人為による環境の改変が、危険と隣あわせの所まで人びとを導いているのである。現実には、地元の観光優先の姿勢が、安全を犠牲にしたと指摘された事故も、いくつか発生している。

火山は、さまざまな恵みを人間社会にもたらしてくれるのだが、その恵みに溺れて大噴火の脅威を忘れかけていると、ときおり思いもよらない災害を、火山は浴びせかけてくるのである。

有珠山や三宅島の例にかぎらず、1986年の伊豆大島、1990年に始まった雲仙普賢岳の活動など、各地の火山が、大きな噴火を引き起こすたびに、火山と人間社会とのかかわりのあり方が問われてきた。

大規模な災害をもたらすような噴火は、1つの火山にしてみれば、数十年あるいは数百年の間隔で発生するのが一般的である。その間隔は、火山の時間にとっては瞬時の休息にすぎないのだが、人間の側にしてみれば、長い静穏の時ということになる。

その平和の時間を、人びとは火山の恵みを享受して過ごしているのである。

火山にはそれぞれ個性があって、どんなタイプの噴火を引き起こすかは、火山ごとに異なっているし、また同じ火山でも、時によって異なるタイプの噴火をすることがある。

そうした火山の性質を十分に把握したうえで、将来大きな噴火が発生したとき、どの地域にどのようなタイプの災害が及ぶかを、常時から把握しておくことが防災上重要な課題といえよう。

その第一歩として、活火山ごとのハザードマップ(火山噴火災害危険区域予測図)を作成・公表しておくことが大切である。

しかし現実には、北方領土を除く陸上の活火山64のうち、ハザードマップが作られ公表されている活火山は、20にも達していない。日本最大の活火山である富士山さえも、ハザードマップの整備が遅れているというのが現状である。

火山周辺の住民をはじめ、不特定多数の観光客の安全を図ることは、地元行政の責務であろう。火山のもたらす優美な景観や温泉など、火山の限らない恵みを観光の資源として客を招くのであれば、訪れる観光客の安全を守る責務が、招き寄せる側にあることはいうまでもない。むしろ、防災対策が整備されていること自体を、観光の目玉にするぐらいの意識が必要なのである。

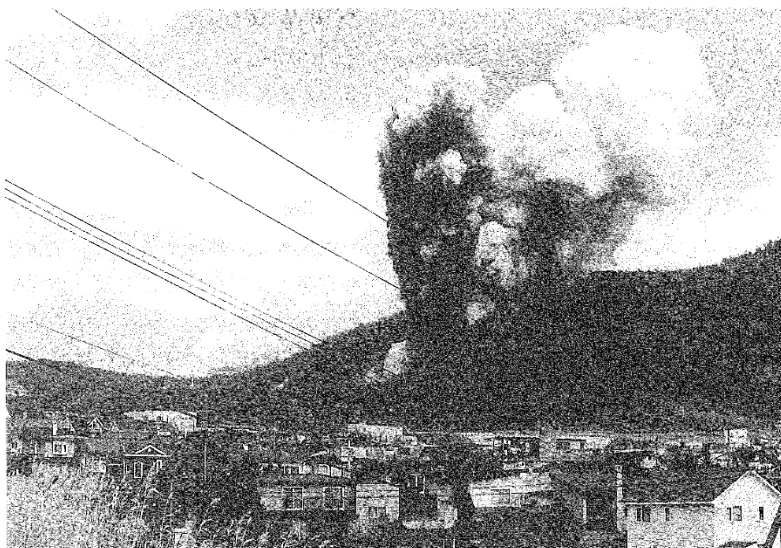
また地域住民も、活火山の山麓に居住する以上は、火山現象に関する理解を深め、将来の噴火に備える心がまえを醸成しておくべきであろう。

一般に火山活動は、始まってから以後どのように推移していくかを読むのがたいへん難しい。そのため周辺地域は、ひとたび大噴火が発生すると、継続的な災害を被ることになり、火山活動が停止した後も、重く長い後遺症が残ってしまう例が少なくないのである。

したがって、活火山周辺の自治体および住民は、それぞれに役割を分担し、互いに補完しあいながら、緊急時の対応、発災後の復旧から復興へのシナリオなどを、常時から

検討し確立しておくことが望まれる。

火山が静かな時にこそ、何をしておくかが問われているのである。



有珠山西山噴火口

写真提供：西胆振消防組合消防署